



【左】「プロアクティブ／グラム大学
日本事務局」の内観
【右】設計者の要望を実現させた、
ガラスから板が飛び出る納まり

上記2点
設計・写真提供：栗田祥弘建築都市
研究所、施工：イシマル

「リアリティ」の追求 現場づくりが建築の質につながる

大学時代は、どんなことを考えていましたか？

3年生頃から、図面を描いたり模型をつくったりすることに「リアリティ」を感じなくなって、自分なりの建築との関わり方を模索していました。ちょうどその頃、土屋公雄先生が講義でおっしゃっていた「ちゃんと実感しろ」、「見て確かめろ」という言葉が今でも心に残っています。

4年次には宮下ゼミに入りました。とても自由なゼミで学生みんなが思いのこをやり、お互いの作品や活動をよく同期や後輩たちで講評し合っていました。その頃は「人の死」というものに興味があって、卒業制作では、「生前葬」じゃないですが、今までに出会ってきた人たちにDMを送って卒業制作展に来てもらい、僕との思い出を1冊の本にするという場をつくりました。いわゆる建築学科の学生の卒業制作とはだいぶ違ったものだったと思います（笑）

卒業後は、大工の道に進まれましたね。

はい。やはり実際にものづくりをしたいと考えて、小さな工務店に就職しました。大工のアシスタントとして1年ほど働いたんですが、その現場で出会った現場監督が、すごく格好よかったんです。職人に説明する時に、サッとスケッチを描いて巧みにイメージを伝えていて、職人だと、大工は大工工事、塗装屋は塗装という一時しか現場が見られないけれど、現場監督は最初から最後まで建物に関わることができるので、いい仕事だなと思いました。

それで大工を辞めて、2級建築士を取って、別の工務店に3年くらい現場監督として勤めました。その後、学生時代から憧れていた「COMME des GARÇONS（コム・デ・ギャルソン）」の創始者である川久保玲さんと、倉俣史朗

さんなど多くのデザイナーと仕事をしている施工会社のイシマルに入るようになったんです。

イシマルでは「COMME des GARÇONS」や「PRADA」の店舗など、多くの現場を手掛けられていますね。

2008年に入社して、これまで20件以上の現場に携わりました。ファッションブランドとの仕事や、トラフ建築設計事務所や SUPPOSE DESIGN OFFICE など、建築家と一緒に仕事をすることも多いです。

イシマルでは、現場監督は小さな現場でも常駐して、基本的に丸1日現場にいるというルールがあります。百貨店などの建て込みは基本的に営業時間外に行うので、昼夜逆転生活になることもしばしばです。実際につくるのは職人さんですが、設計者の意図をどういう納まりにして職人に伝えるか、いい建築づくりのためのいい現場、手戻りがなく段取りよく進む現場をどうつくっていくかということが私の仕事です。そのためにいちばん重要なのは、職人とのコミュニケーションだと思います。誠意を持って伝えるのは大前提で、さらに人それぞれに伝え方を工夫するようにしています。伝え方が悪いと施工が全然違う方向に進んでしまうので、小さなことですが重要なことです。

職人さんたちそれぞれの癖や考え、趣味嗜好などを理解することで、最近はいびふスムーズにできるようになりましたが、最初の頃は大変でした。職人の機嫌を損ねて現場の空気を悪くしてしまったり、伝えたのに自分の思ったようにやってくれないと、怒ったり泣いたり、自分の感情をコントロールできないこともありました。

つくった人の感情は成果物にも表れるので、怒ってつくれば、その怒った感じが出るし、面倒くさいと思ってつくれば、それが出てしまいます。逆に、気持ちよくつく

ることができれば、その感じが仕上がりに出るんですよね。だから、気持ちよくつくってもらえる現場の雰囲気や、しっかりとしたスケジュール管理を心がけています。

イシマルは完成時の仕上がりや納まりにとても厳しく、先輩が見に来るときは、クライアントのチェックよりも緊張します。やってしまったな……と思っているところがあると、先輩は言わなくても気がついて、何も言わずにそこをじっと見ているんですよ（笑）、そういう厳しい目が、高い施工技術や精度を支えているのだと思います。

代表作や印象に残っている仕事はありますか？

すべて完璧にできたと言えるものはないですね。スケジュールや現場の段取りを含めると、なにかしら反省するところがあります。その中でもひとつ挙げるとしたら、当時、渋谷バルコの期間限定店舗だった「GANRYU」という「COMME des GARÇONS」の若手デザイナーのブランドの店舗はよくできたと思います。スケジュール管理から製作図面まですべてを一人で担当して、描いた図面通りにでき上がり、現場もスムーズに進んだので達成感がありました。

最近の仕事では「プロアクティブ／グラム大学日本事務局」です。国際会計士を育成する学校なのですが、建物を使いながら施工をするので、その手順などに工夫が必要でした。2層吹き抜けのエントランスホールにひだ状の壁と天井をつくっていて、空間を仕切るガラス壁を天井の板が突き抜ける特徴的な納まりになっています。設計者から板がガラス面から突き出しているように見せたいという要望があり、どう納めるかを考えました。

今後の目標を教えてください。

今の職場は、気の合う人たちだけでものをつくっている、いわば「施工サークル」のようだとよく言われるんですが、その環境をととても楽しんでいます。今後も「みんなとつくる」ことを大切に仕事を続けて、さらに現場だけでなく、予算などを含めたプロジェクト全体を組み立てたいようになりたいと思っています。

ありがとうございました。

越後妻有アートトリエンナーレ で見た、建築家と地域づくり

鶴谷 ゆうみ
【22期】

鶴谷 ゆうみ Tsuruya Yuumi
1967年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。
大林組設計部を経て、アートフロントギャラリー入社。
ファール立川アート PJ、宮城県図書館アートワーク、
トーマス・ヘルツォーク建築展などにかかわる。
大地の芸術祭では作品制作、広報業務を担当。

〔下写真〕第1回開催に向けて制作された、イリヤ&エミリア・カバコフの「棚田」。作品制作担当として関わった
写真：Osamu Nakamura

アートによる地域づくりの先駆けとされる「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は、今年の夏（7月26日から9月13日まで）、第6回目の開催を迎える。豪雪地として知られる新潟県十日町市・津南町の東京23区に匹敵する広大な地域に300近くのアート作品が点在する、世界最大級の国際芸術祭。人口約7万人のこの土地に、前回2012年は会期中51日間に48万8千人が訪れた。農業を通して大地とかかわってきた「里山」の暮らしが今も豊かに残っている地域で、「人間は自然に内包される」を基本理念とした、アートを道しるべに里山を巡る新しい旅は、国内外から注目を集めている。

私はこの芸術祭を通じ建築家の職域が拡大していくのを見てきた。建築施設や公園広場の設計など従来型の「建てる」建築家の仕事から、廃校になった木造校舎を美術館や宿泊施設に再生するためのリノベーション、地震で半壊した古民家を建築家、アーティスト、地元の人と一緒に再生する農家レストランへと再生する仕事。地域の廃校や空き家という「負の遺産」をアートの展開の場所とし、厳しい自然と共存してきた地域の記憶をアートによって際立たせる試み。

アートに引き寄せられた人々が衝突しつつも地域・世代・ジャンルを超えて協働することで新しい地域づくりの形が生まれている。過疎高齢化が進む日本全国で、越後妻有で行われてきたこのようなジャンルを超えた多様な人々が交錯する場を生み出すような仕事求められているのではないだろう



2014年度日月会企画イベントの報告

4月19日 | フォルマ・フォロセミナー第10回

「建築ジャーナリズムの果たすべき役割とはー建築を批評することは必要なのか、あるいは批評すべき建築が不在なのか」
遠藤信行（TOTOギャラリー・間代表、TOTO出版
発行人／編集長 14期）

司会：岩岡竜夫（東京理科大学教授 16期）
坂本一成先生とともに「建築のイメージ調査」を行い、『建築文化』誌を経て、「TOTO出版」の立ち上げに参加した遠藤氏。建築メディアの歴史を概観しつつ、現在までの活動を紹介いただいた。

4月26日 | 日月会シンポジウム第5回

「学生時代に取り組んだ『課題』を通して」

パネラー：加藤哲也【18期】、酒向昇【21期】、田宮晃志【24期】、林英理子【27期】
司会進行：小倉康正【18期】

ご挨拶

会員の皆様、建築学科設立50周年おめでとうございます。昨年は、通年行事に加え、執行部を中心に50周年記念事業を活発に行った1年となりました。また、芸祭期間中に、例年ホームカミングデイと同時に開催していたシンポジウムは、校友会主催のサロン「風月」のメイン企画として共催し、多くの卒業生が参加されました。

建築学科の50年は、学科の歩みであるとともに、我々卒業生のつくり出した歴史でもあります。執行部内で記念事業の企画を模索する中で、日月会会員の次の50年の道しるべとなる本を作ろうと気運が高まったのは、2013年の夏。幾多の議論の末、「設計課題」が本のテーマに決まりました。それは全卒業生の通って来た道であるからだけではなく、与えられた「課題」に対し、懸命に考え、答えを導き、それをプレゼンテーションするという行為は、建築を設計するための具体的に重要な訓練です。自ら問題を設定し、それを解決する訓練であり、建築だけでなくその後のさまざまな人生を切り開く力を身につ

小林 敦 Kobayashi Atsushi
事務局長【18期】

7月12日 | 日月会建築賞

太陽賞：「吉祥寺現代美術館」川田琴音
満月賞：「300000ミリメートルの本棚」遠藤貴大
三日月賞：「STEERING」斉藤有宏
新月賞：「キラキラ橋商店街 [Pick up girl]」田中楓
七夕賞：「つなぐ」三ツ井 岳
審査委員長：遠藤謙一良【18期】
審査員：丸川真太郎【9期】・林英理子【27期】・
原田将史【35期】・川勝悠也【44期】

9月20日 | 建築学科設立50周年式典

主催：武蔵野美術大学建築学科、共催：日月会、後援：校友会

10月25日 | 日月会シンポジウム第6回

「学生時代に取り組んだ『課題』を通して」

パネラー：小泉一斉【29期】、田中匡美【36期】、伊藤友紀【40期】
司会進行：小倉康正【18期】

酒向 昇 Sako Noboru

日月会会長【21期】

ける、人間教育の基礎であります。ますます問題解決が必要となってきた現在、「課題」を通じて得た学びは何か。50周年を機に振り返る試みは、すべての卒業生たちにとって意義があると考えました。50年の歴史をどこまで表現できたか定かではありませんが、私たちは前執行部が準備を始めた50周年記念事業の関連イベントを発展させ、多くの卒業生の声を掲載した『武蔵野美術大学建築学科 設立50周年記念誌 1964-2014—設計課題を語る [フォルマ・フォロ増刊号]』を発刊いたしました。

50周年催事や出版に賛同いただいた発起人の皆様をはじめ、多くの方の協力・出資をいただき、催事と出版が可能となりました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。また、貴重な時間を割いて、企画・編集・課題収集などに絶大な協力をいただいた執行部・50周年委員の皆さん、卒業生・在校生の会員の皆様、重ねてお礼を申し上げます。会員の皆様・研究室とともに、次の50年に向けて、日月会を盛り上げて行きたいと思っています。

「建築学科50周年記念式典」開催のご報告

去る2014年9月20日（土）、鷹の台キャンパス（美術館ホールおよび鷹の台ホール）にて建築学科50周年記念式典を開催いたしました。プログラムの内容は、記念式典、記念シンポジウム（竹山実名養教授、保坂陽一郎名誉教授、長尾重武教授による鼎談）、記念祝賀会、「ムサビケンチクダヨ！全員集合 Powered by PechaKucha」。同時開催に、「キャンパス見学会」。来場者の方へは『武蔵野美術大学建築学科設立50周年記念誌 1964-2014—地平線を超えて』を贈呈。出席者数：発起人208人／一般卒業生153人／非常勤講師5人／招待者8人／学内他学科13人／在校生49人／その他21人 合計457人
ご来場いただき、ありがとうございました。



ロゴデザイン／根間太作【30期】

表紙写真

7号館の壁面。建築学科を設立した、初代主任教授の芦原義信氏によって設計された、特殊型枠コンクリート打放し（1965年竣工）。8号館が建設される以前は、7号館で建築学科の授業が行われていた。

編集後記

本誌編集時はまだ、フォルマ・フォロ増刊号の完成形を手にしていません。しかしながら、特集においてこの5年間を振り返ることとで、たしかな手応えを感じました。ぜひ増刊号をお楽しみください。[onal]

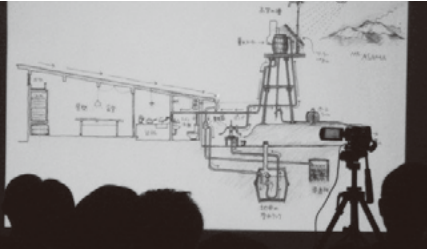
編集：尾内 志帆、飯田 彩、瀧澤 純希
デザイン：松井 雄一郎・長尾 周平
印刷：株式会社山田写真製版所
発行：武蔵野美術大学建築学科
同窓会・日月会
http://www.nichigetsukai.com
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内

フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会
MAR.1.2015 | VOL.15



もうひとつの年表 2009-2015

『フォルマ・フォロ』増刊号では、過去の課題文を集め「設計課題年表」を作成した。本特集では、50周年記念事業に関する日月会の動きを、メンバーの語りとともに振り返り、活動の背景にある個人の想いや経験を「もうひとつの年表」としてまとめ、紹介する。

2009年	会則の改訂から始まった 更田会長による執行部会の基盤づくり
3.28	総会*1 更田邦彦会長就任 日月会ホームページ再開 「プレ・フォロ」発足
9.5	フォルマ・フォロセミナー第1回(坂本一成)
2010年	
3.27	総会
4.24	フォルマ・フォロセミナー第2回(竹山実)
9.4	フォルマ・フォロセミナー第3回(長谷川堯)
10.30	日月会ホームページリニューアル シンポジウム「日月進歩」第1回
2011年	
3.26	総会
4.23	フォルマ・フォロセミナー第4回(保坂陽一郎)
9.10	フォルマ・フォロセミナー第5回(中村好文)
	
歴代の先生方によるセミナーにおいて50年を辿り始める	

- *1 特記のない総会や執行部会は、吉祥寺校を利用
- *2 2013年以降の会議の開催日や内容については、酒向会長の手帳を元に記しており、一部事実と異なる場合もあります。
- *3 当初記念誌は一冊としてまとめられる予定でしたが、研究室本と日月会本(フォルマ・フォロ増刊号)と分冊することによって、より多様な卒業生の活躍を紹介できると配慮されました。

幹事会」を、実効性のある組織に改変する必要が
あると思っていました。そこで、会則を改訂すると
ともに「代表者のフォロ」(後に「プレ・フォロ」と改
名)という会議を立ち上げ、執行部とプレ・フォロ
との互恵関係のもと、シンポジウムを行ったり会員
の連絡網整備を進めていたことなどが、現在の基
盤のひとつになったように思います。

更田 邦彦 [16期]

2013年 更田会長から酒向新会長へ
50周年記念式典に向けた企画スタート*2

3.16 執行部会

3.30 総会 酒向昇会長就任



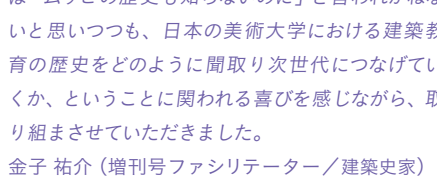
2012年
3.31 総会
4.21 フォルマ・フォロセミナー第6回(真壁智治)
9.8 フォルマ・フォロセミナー第7回(相澤韶男)
10.27 シンポジウム「日月進歩」第3回

新執行部体制が確立され、ホームページも再稼働
した時点で、以前の会則に定義されていた「代表

7.15	企画・運営体制の協議@都内某所
8.7	布施先生含め企画立案
8.31	執行部会 「設計課題」というテーマの可能性を検討
9.7	フォルマ・フォロセミナー第9回(宮下勇)
	執行部会
10.5	執行部会
10.11	金子祐介さん参加



ムサビの卒業生の聞き取り役として、唯一ムサビ以
外の人間として参加することになりました。最初
は「ムサビの歴史も知らないのに」と言われかねない
と思いつつも、日本の美術大学における建築教
育の歴史をどのように聞き取り次世代につなげてい
くか、ということに関われる喜びを感じながら、取
り組まさせていただきました。



10.18 布施先生、金子さんの参加を合意

10.26 シンポジウム「日月進歩」第4回

11.9 編集会議@田宮さんの事務所

酒向会長から「手伝ってよ」と電話があったのが
2013年1月。職務内容を理解する間もなく50周年
委員に巻き込まれ、本業の合間を縫って若い委員
の不満を聞き、フォローをしつつ多くの年長者の
方々のオーラルヒストリー収集に同行し続けまし
た。記録を残し後人に伝えていくことは、未来を



描く下書きになることを実感した2年間でした。
田宮 晃志 [24期・酒向会長の“相談役”担当]

11.12 編集会議、告知と目次について

11.30 インタビュー人選スタート

12.7 編集会議、研究室本*1と日月会本として
フォルマ・フォロ増刊号*2の分冊化*3

12.14 執行部会

12.18 *2 川床・竹山インタビュー打診

12.19 *3 編集会議

2014年 建築学科設立50周年
記念出版物の制作と式典開催に邁進

1.11 執行部会 課題文の収集の本格始動

課題は大学の講義において重要なもの。なので多
数の手がかりをつなぎ、まとめていくだけと思っ
ていました。しかし、蓋を開けてみると霧の中。曖昧
な記憶と、少ない記録を元に一つひとつ繋いでい
く地道な作業でした。記録よりもたくさんの方の
記憶に助けられたように思います。

杉山 英知 [37期・課題収集担当]

2009年に非常勤講師として母校に関わるようにな
りました。酒向会長の誘いで日月会に参加したの
が2013年。事務局長として日月会の活動に取り組
む中で、卒業生と学生の接点をこれまで以上につ

くりたいと感じていました。50周年記念式典をは
じめとする行事やフォルマ・フォロ増刊号の「設計
課題」というテーマを通して、さまざまな卒業生や
学生が交流するきっかけをつくれたとすれば幸い
です。50年という時間の中で変化したことと変わ
らないこと、それをあらためて感じた年でした。

小林 敦 [18期・酒向会長の“女房役”担当]

*2 インタビュー方針、連絡スタート

1.25 *3 編集会議

1.28 *4 *5 フリックススタジオ参加スタート

2.1 *6 編集会議

3.1 *7 編集会議



フォルマ・フォロ14号で8号館3階の空間利用の変遷を特集

3.6 *8 編集会議

3.11 *9 *10 編集会議@フリックススタジオ

3.6	*11 編集会議
3.11	*12 *13 編集会議@フリックススタジオ
3.15	執行部会 シンポジウムメンバー人選
	*14 インタビュー反省会
3.20	*15 編集会議
3.27	*16 編集会議
3.29	総会
4.3	*17 編集会議
4.19	フォルマ・フォロセミナー第10回(遠藤信行)



日月会では2009年度より、本学建築学科に深く
縁(ゆかり)のある建築家、建築史家、研究者、デ
ザイナー等による公開講座を企画開催し、卒業生
の方々を含めて毎回多くの皆様に参加していただ
いております。日月会と建築界を結ぶフォロ(＝
広場)として、今後さらに充実したセミナーとな
るよう継続していきたいとします。

岩岡 竜夫 [16期・セミナー企画担当]

4.19	執行部会 リスト管理について議論
4.23	*18 編集会議@フリックススタジオ
4.26	*19 編集会議
	シンポジウム「日月進歩」第5回開催
5.1	*20 編集会議@フリックススタジオ
5.16	*21 編集会議
6.7	執行部会

6.21	執行部会 インタビューについて
6.27	*22 日年表サイズ検討
7.6	*23 タイトル決め
7.?	アンケート依頼開始

アンケートにご協力いただいた皆様、ありがとうご
ざいました。各時代の「今」を建築家はどうように
問いかけ、若者たちはどう応えたか。発見や共感、
反発。さまざまな思いが伝わってきました。私も竹
山先生に影響を受け、海外に飛び出していきました。
大学は変わらず皆の背中を押す存在であって
ほしいです。詳しくは増刊号をご覧ください。
坂本 和子 [24期・アンケート収集担当]



多世代が集い、建築学科の歴史を語るプレ・フォロの座談会



ふだんのプレ・フォロの活動のほか、50周年記念事
業へ向けて、名簿の再整理を行いました。それは
とても困難なものでした。今回のタイミングではど
うしても迎れないままの代もあり、これはこれから
も引き続き取り組んでいきたいと思います。本当
に数多く、多岐にわたる卒業生を輩出した建築学
科の奥行きを感じるところでもありました。

棚橋 玄 [41期・卒業生名簿整理担当]

7.19	酒向・尾内打ち合わせー編集参加
7.24	*24 *25 編集会議@フリックススタジオ
8.23	*26 編集会議@フリックススタジオ
8.30	*27 編集会議
9.17	*28 編集会議@フリックススタジオ
9.20	50周年記念式典開催／ 50周年記念本(研究室編) 発刊
10.4	執行部会
10.9	*29 編集会議@新宿サテライト
10.15	*30 編集会議@フリックススタジオ
10.20	*31 編集会議・年表の整理@河野事務所

課題年表の制作は、情報の整理とチェックの連続
でした。この年表の背景には膨大な数の課題文が
あり、その1枚1枚に出題者の当時の思想や興味が
直に記されているように感じました。また先生方

学科開設50周年に向けて2010年に始まった日月
進歩(シンポ)は、卒業生をパネラーに招き6回を
数えました。50年にわたり新陳代謝を続けてきた
建築学科という生き物の生態、嗜好を検証し、こ
れからの考える試みでした。パネラーのムサビ時
代とその後の関連を切り口にしたのが前半の3回。
パネラーの課題作品を振り返ったのが後半の3回で
した。これから生き物の代謝の様子をいくらか垣
間見れたように思います。しかしまだまだ得体が
知れないのです。

小倉 康正 [18期・シンポジウム司会担当]

10.27 *32 編集会議@丸の内オアゾ



が課題名への強いこだわりを持っていることも新
たな発見でした。年表を眺めてみると、歴代の先
生たちの設計課題への熱い情熱が伝わってきます。
鈴木 竜太 [36期・課題年表整理担当]



増刊号の編集長を任されたのは、ちょうど修士論
文を提出したすぐあとでした。一度編集のキャリ
アから離れた私が、一冊の本をまとめることがで
きるのか、とても不安でした。ところが始めてみる
と、嘘のように編集作業は楽しく充実しており、
ぶじに円満な最後を迎えることができました。「お
わりははじまり」。新たなスタートをきった日月会
が、これからも盛況でありますように…。

尾内志帆 [39期・本誌編集担当/増刊号編集長]

最後の編集会議は、飯田くんの事務所イノヨンにて

中途半端に学科を飛び出した自分がこの仕事をす
るなんて、話ぐるまで考えもしなかったけれど、
そんな学科のおおらかさが今の自分をつくってい
るような気がする。50期分の時間の末尾にいる僕
らは、なかなか先の見えない場所に立っている気
がするけれど、100年誌ではそこそこ偉そうなこと
を言うように頑張らなくちゃと思います。

飯田将平 [44期・増刊号デザイン担当]

3.1	『フォルマ・フォロ』15号 50周年記念本(日月会編)として 『フォルマ・フォロ』増刊号発刊
-----	--

ムサビOBでない自分が、このような記念すべき冊
子の編集に携わることができ、とても嬉しく思ひ
ます。平日夜、土日祝、夏季休暇、社員旅行中、年
末年始も編集作業をしたのは大変ではありましたが、
ムサビの皆さんがいい人ばかりでとても楽しい時
間でした。100周年記念誌には何が記され、どん
な人たちが形になるのか、今から楽しみです。

山道雄太(増刊号編集協力/フリックススタジオ)



増刊号の編集長を任されたのは、ちょうど修士論
文を提出したすぐあとでした。一度編集のキャリ
アから離れた私が、一冊の本をまとめることがで
きるのか、とても不安でした。ところが始めてみる
と、嘘のように編集作業は楽しく充実しており、
ぶじに円満な最後を迎えることができました。「お
わりははじまり」。新たなスタートをきった日月会
が、これからも盛況でありますように…。

尾内志帆 [39期・本誌編集担当/増刊号編集長]

